

海外事務所だより

シドニー事務所

# 日豪姉妹都市50周年を迎えて

(財)自治体国際化協会シドニー事務所所長補佐 平澤 美佐 (広島県派遣)  
奥野 公彦 (和歌山県和歌山市派遣)

## 日豪姉妹都市 50周年記念フォーラム

### 日豪姉妹都市の立役者

深く刻まれた皺しわの奥に見える、優しいけれど強い目の持ち主。それがパウロ・グリーン神父に初めて会ったときの印象です。

グリーン神父は、1963年に日豪間で初めて姉妹都市を締結したニューサウスウェールズ州リズモア市と奈良県大和高田市を結びつけた方です。戦争の傷跡が残る中、オーストラリアには依然として強い反日感情が残っていました。そんな中、大和高田市内の教会に赴任した神父は、日本とオーストラリアで集めた募金で幼稚園を建てました。その後、神父はオーストラリアがもつ60以上の姉妹都市に、日本の都市が皆無であることを知るようになります。それは、神父の出身地であるリズモア市と大和高田市の間で姉妹都市提携に奔走する契機となりました。

当時、かつては敵国だった両国に根強く残っていたしこりの大きさは、想像に難くありません。しかしながら、「憎しみは憎しみしか生まない。次世代のためにも、“愛”を伝えていかななくてはならない」先輩神父からその教えを引き継いでいたグリーン神父は、日本とオーストラリアの架け橋として尽力されてきました。その活動は姉妹都市にとどまらず、東日本大震災の被災者援助として日豪両国で募金活動され、多大な寄付も行ってお

られます。

そうした功績に対し、2013年8月5日、姉妹都市50周年を記念したフォーラムにおいて、クレアから感謝状を贈呈しました。かつて姉妹都市提携に奔走した青年は現在85歳となり、その笑顔には、年輪のごとく皺しわが刻まれています。50年前に形にしたものが長い年月をかけても今なお変わらず継続され、次世代に引き継がれていく——。この瞬間に立ち会うことができた会場の皆が、次の50年を期待しました。

贈呈後、神父からは次のような言葉をいただきました。

「歴史の短いオーストラリアと古い文化をもつ日本が、互いに尊敬し、本当の愛をもって、より良い世界を作っていきましょう」

文字通り「両国の架け橋」である神父の言葉に、会場の拍手はしばらく鳴りやみませんでした。



感謝状を授与されたグリーン神父 (右から3人目)

## 姉妹都市がもたらすモノ・コト

今回のフォーラムには、総勢150人が参加しました。オーストラリアおよび日本の自治体や姉妹都市協会の関係者、オーストラリアの大学生などが主な出席者です。

姉妹都市締結50周年を迎えた両市長からは、これまでを振り返り、友情を培ってきた先人をたたえ、今後の発展を祈念するスピーチがありました。

また、後半のパネルディスカッションでは、姉妹都市交流を活発に行っているシドニー市、マンリー市、パース市の3市からそれぞれの特徴的な活動が発表され、今後の姉妹都市のあり方などについて参加者とともに意見交換を行いました。



質疑応答で盛り上がるパネルディスカッション

中でもパース市の取り組みとして、姉妹都市交流による成果をできる限り数値化し、評価していることに来場者の多くが注目しました。最近、日本の多くの自治体が数値目標を掲げ、その達成度を測るシステムを持っています。とりわけ、国際交流などの分野は、効果や成果を数値化しがたく、苦慮している担当者の方も多いのではないかと思います。

パース市は2013年に「the Vision 2029+ Strategic Community Plan vision statement (注1)」を策定し、そこに掲げた目標と照らし合わせて効果を測定している旨発表されました。第三者機関と連携し、メディアへの露出度や市への投資件数などを指標としています。

これらを受けて、ファシリテーターのシドニー工科大学地方自治センター(注2)長からは今後、姉妹都市の成果に関する多角的な調査・研究を行っていきたいと抱負を述べられました。

姉妹都市交流を発展させるうえで、それは今後の自治体にとって重要なものになると確信しています。今回のフォーラムでは、日豪両国の相互理解を一層深め、姉妹都市交流のさらなる発展のための新たな一歩を踏み出すことができたと考えています。

## リズモア市と大和高田市の 姉妹都市50年の友情の証

### 友好の価値

「時代とともに当時とは随分と様変わりしてしまった両市において唯一変わらないものがあります。それは、両市が重きをおく友好関係の価値です」

これは、1963年8月7日水曜日から50年が経った同日にリズモア市で催された、50周年を祝う式典でリズモア市長が述べた言葉です。この日、2人の市長によって友情の絆が再確認され、この価値がさらに高められたのです。

現在、日豪間では、文化、芸術、教育、経済、産業、スポーツなどさまざまな交流が繰り広げられています。その中でも、学生の相互交流はもっとも代表的な事例となっています。このような交流には「草の根の活動」という共通点があります。50年間の交流の歴史も両市民の方々の活動なくして成し得なかったのです。そして、「草の根の活動」を牽引してきた方々は、長い年月を姉妹都市交流活動にささげてきているのです。この最初の交流に追随して、多くの姉妹都市関係が築かれてきました。しかし、年月を重ねて行われてきた友好交



立会人を前に再確認の署名。左前がリズモア市のジェニー・ダウェル市長、右前が大和高田市の吉田誠克市長

流においてキーパーソンになる方々が高齢化してきたという課題も見受けられます。

今回、50周年の記念式典に出席した人たちのすべてが100周年の記念式典に出席することはできないでしょう。だからこそ、今の若い世代に活動を引き継ぎ、次の世代が近い将来、「草の根の活動」を通じて、そのお互いの姉妹都市の関係の価値に重きを置き、変わらぬ友好の絆を築いていかなければならないのです。

### 友好交流の原動力

記念日の翌日、大和高田市からお祝いに駆けつけた総勢50人の市民の皆さんが「大和高田デイ」を開催し、リズモアの小学生や高齢者など600人を超える方々におもてなしをしました。その中には、過去に大和高田市を訪れた方もたくさんいました。

その1人で、かつて交換学生として大和高田市を訪れたレイチェルさんは、先生になりたいという当時の夢をかなえ、小学生100人ほどを引き連れて「大和高田デイ」に来てくれました。子どもたちは、凧あげや折り紙、ゆかた体験、書道など、いろいろな日本の文化に触れ、大和高田の人たちと交流し楽しみました。



「大和高田デイ」の様子

このような友好の交流が、それぞれの姉妹都市においても繰り返されているのです。そして、交流の思い出や感動が、友情を深め交流を続けていく原動力になっているのでしょう。

この原動力をもとに、リズモア市と大和高田市の姉妹都市の草の根の交流を支えている市民団の方から、次のように思いを綴っていただきました。

「感謝」、「感動」、「感激」、そして「希望」に胸をときめかせたシドニー及びリズモア両市への8日間の旅は、80歳を過ぎた私に、他に比類なき意義ある経験となりました。

そして、姉妹都市締結50周年の記念式典に、大和高田市民訪問団員として出席できた幸せを今、ひしひしと感じています。

なんと言っても、忘れてならないことは、名倉仙蔵元大和高田市長とパウロ・グリーン神父のご尽力であります。戦後間もない時代、人々は友好の精神の下で仲良くしなければならぬ、という信念を携えて、神父は、長く大和高田市で活躍されました。その結果、50年という長期にわたる友好関係が築かれてきたのです。感謝あるのみです。

ジェニー・ダウエル現リズモア市長さまの人格や物の考え方にも、感服しました。とりわけ明るく、我々に接してくださいました。日本文化を理解しようと努められているお姿は、忘れられません。また、「大和高田デイ」では、おおらかなリズモア市民や、目をきらきら輝かせた多くの子どもたちと、親しくお話することができました。

この様々な貴重な思い出を、次世代の大和高田市を担う若者に語り継ぎたいと念じています。それが今後、永遠に継続するであろう日豪友好、並びに大和高田・リズモア姉妹都市友好関係の礎となり、ひいては世界の平和に繋がると信じているからであります。

両国・両市の更なる発展を祈念し、これからも姉妹都市ニュース『The Bamboo Shoots』の発行に頑張ってもらいたいと、誓いを新たにいたしております。

大和高田市 斧山平八郎

今現在も続けられている姉妹都市交流が日豪の絆をさらに強いものにする大切なきっかけとなっています。それぞれの姉妹都市の交流の思いを、次の世代にバトンタッチして、永遠の関係になることを願っています。

(注1) 2013年6月に採択されたパース市の戦略的プラン。コミュニティーの抱負や目標、ビジョンを定めたもの。

(注2) 大学と地方自治関係機関の協同組織。自治体の専門性とスキルを高めるために設立されている。